三鷹市立高山小学校　令和8年度【　図画工作　】科　授業改善推進プラン

	前年度授業改善推進プランの検証	学習状況の現状と課題	指導方法の課題と授業改善策
第1学年	○作品のイメージをもちやすくするために、第１時の時間を丁寧に扱い、見本や作り方の動画を提示したことで、児童の製作意欲を高め、どの児童も作品を仕上げることができた。 ○色画用紙、折り紙、お花紙など様々な質感の紙を使った作品を作ることで、材料の良さや違いを感じ、展覧会に向けた作品作りを通して、深めることができた。休み時間などは、塗り絵を自作したり、粘土遊びをしたりする児童もおり、造形遊びを楽しんだ。 ○絵の具の学習では、画用紙、バケツ、パレットを置く場所などを明確に図で示し、繰り返し学習することにより、少しずつ手際よく行うことができた。その他の用具操作も上達した。 ○鑑賞をする際、鑑賞カードを用意し、自分の作品への思いを豊かに表現したり、相互評価を取り入れ個々の自信につなげられたりするようにした。展覧会の鑑賞では、他学年、わか竹学級の作品に共同作品に心を動かし、言葉で表現した児童が多かった。	○第１時に、完成作品や製作工程を写真などで提示したことで、見通しをもって製作することができた。 ○絵の具の学習では、興味・関心をもてる児童が多かった。導入時に、画用紙、バケツ、パレットを置く場所などを明確に図で示し、確認しながら製作することができた。 ○はさみの使い方やの絵の具などの用具の使い方については、細かくはさみを使う、丁寧に塗り込むなど、粘り強く取り組むことが苦手な児童がいる。また、左利きの児童や手先の不器用さがある児童に関して、はさみや絵の具の使い方に課題が見られる。 ○学期ごとに、平面・立体・工作・造形遊びをバランスよく活動に取り入れられるよう、年間の単元指導計画の精査および改善が必要であると感じた。 ○近くの友達の作品に影響を受けてしまい、似通った作品になってしまうことがあった。	○学習の導入では、完成作品や製作工程を示し、具体的に分かるように例を提示することでイメージをもって考える時間を十分に確保したり、製作に取り組む前に児童間の意見の交流がもてたりできるようにする。 ○絵の具の学習では、絵具の使い方などの資料をいつでも確認することができるよう教材の準備、教材研究が必要である。さらに、点描や線での表現の面白さ、混ぜ色の美しさなど作品を作る工程の中でも表現できるよう練習していく。 ○はさみの使い方やの絵具などの用具の使い方については、丁寧に塗り込む、細かくはさみを使うなど、粘り強く取り組むことができるようにする。また、左利きの児童や手先の不器用さがある児童への個別に丁寧な指導が必要である。 ○はさみや絵具などの活動が繰り返し学習することができるよう、絵具を使う単元の年間の学習計画の作成が必要である。 ○教科書や友達の作品からヒントを得たり、指導者側から個別に具体的な声掛けをしたりすることで、児童が最後まで集中して作品作りに取り組めるようにする。 ○学級全体で作りたいものを伝え合う活動を取り入れ、様々な発想ができるようにし自由な作品作りを促す。また、互いの作品を見合う時間を設けることで相互評価や自分の作品に込めた想いを伝え合い、個々の自信につながるようにする。
第2学年	○導入では、完成した作品の見本をデジタル教科書で見せることで、自分の完成作品を想像させることができた。また、自分の思いの完成図を一度イラストに描き、イメージをもたせることで、どの児童も取り組みやすくなった。 ○教師が活動に差が出る場合を想定し、作業が進まない児童にとっての手掛かりとなるような模型を、教師が作成し参考にさせたが、進度の差が大きかった。 ○鑑賞の時間をしっかりととることができたことや、ワークシートを工夫し鑑賞の視点を明確にしたことで、友達の作品の良いところや面白いと感じたところを、自分なりに具体的に文章に書くことができた。	○昨年度の展覧会での活動が生き、自分が表現したいことを進んで形にしていく児童や想像したことを自由に描いている児童が多かった。反面、自分の作品に自信がもてず教科書や友達の作品の真似で終わってしまう児童がいた。 ○消防写生会などを通して、丁寧に塗り込んだり粘り強く取り組んだりした。細かくはさみを使うことやのり・テープなどを適切に使用することなど、経験不足で思うように進まない児童がいる。 ○友達の作品を楽しく見合ったり、材料や素材の良さを鑑賞する活動ができた。互いの良さは、付箋を交換することで交流できた。見どころを自分で発表したり説明したりする活動については言葉が選べない児童が多かった。	○導入時に「完成図（設計図）」を作り、様々な発想ができるようにし、構想を伝え合う活動を取り入れ、自由な作品作りを促す。途中で他の児童の作品を紹介したり見合ったりすることで、作業が進まない児童の手掛かりとなるようにする。仕上がり見本や技法を活用した参考作品を準備することで、イメージを膨らませる時間を設ける。 ○絵の具・はさみ・のり・テープなどの使い方など視覚的な資料を掲示して行うことで、理解しやすく、見ながら作業できるようにする。特に時間がかかる児童や苦手意識がある児童には、繰り返し見せるなど個別に支援をしていく。 ○鑑賞活動に備えて、作品作りの前にも「完成図（設計図）」を作り、作品へのイメージをふくらませるようなワークシートを工夫する。鑑賞活動の際には、裏面に、鑑賞の視点を明確に示すなど、書きやすさ、話しやすさを狙って指導する。
第3学年	○具体的な資料の提示によって児童が意欲的に学習に取り組むことができた。一方、単元毎のテーマに向かいやすいように、題材内容を見直していく。 ○アイディアスケッチ→作成→鑑賞の授業構成を繰り返し行うことで、友達のアイディアを参考にしたり、違う視点を見つけたりすることができた。 ○鑑賞の視点を明確にし、自分や友達のアイディアや技能に着目させることで、友達同士で良さに気付いたり、伝え合ったりすることができた。 ○図工室から借りる道具については、各クラスでの使用時期が重ならないよう、単元計画を早めに立てる必要がある。	○意欲的に発想を広げて製作できる児童がいる一方で、自信のなさから教科書や友達のまねで終わってしまう児童がいる。 ○友達の作品を楽しく見合う鑑賞活動が行えているが、表し方など鑑賞の視点をもって互いの良さを伝え合う活動が十分にできていない。 ○完成した作品の見本を見せることで、安心して活動に取り組むことができた。また、設計図を描くなど想像を膨らませる時間を取ることでイメージをもって取り組みやすくなった。	○完成した作品の見本を見せて、児童が見通しをもてるようにする。 ○設計図を描くなど想像を膨らませる時間を取ることでイメージをもって取り組みやすくする。 ○鑑賞では、鑑賞の視点を明確にする。また、友達の作品の良いところを付箋に書いて渡すなど、友達同士で良さを伝え合う活動の工夫をすることで、作品の良さに気付く時間を確保する。 ○自信がもてない児童がヒントを得、最後まで集中して作品作りに取り組めるように、活動の途中で作品を見合う時間を作る。
第4学年	○時間ごとに、参考作品や到達目標を掲示するなど可視化することで、児童の理解を進め、作品を更に良くしようとしたり、技法を応用したりする意欲を喚起することができた。 ○製作の見通しがもてない児童が手順や技能の活用方法などの説明を聞き、実際に試す時間の確保が必要である。 ○自然な相互鑑賞の場となるよう、机間指導時に作品の良さを伝えることで、活動の中で新たな見方・考え方に触れる場を設けたことで、鑑賞の視点を明確にもって相互鑑賞したり、作品をより良くしようとしたり、粘り強く取り組んだりする姿勢を身に付けることができた。	○見通しの不足：製作の段取りや時間配分をイメージできず、時間内に作り終えられない。 ○言語化の弱さ：友達の作品のよさを感じ取っても、それを表現する言葉（語彙）が不足している。	○毎時間の「到達目標（めあて）」と「手順」を視覚的に常時提示し、児童自身が見通しをもてるようにする。 ○鑑賞の観点（色・形・技法など）を絞り込み、ワークシートや小グループでの対話を通じて「よさを言葉にする」活動を仕組み、語彙力を育てる。
第5学年	○構想の場面でアイデアスケッチやワークシートへの記入を行わせたことで、色や形のもつイメージを、自身が表したい形に当てはめながら製作に活かすことができた。 ○児童に個別に適切な目標を定め、題材に対してそれぞれの課題意識をもたせたことで、材料や技法を自ら選択しながら製作することのできる児童が増えた。 ○鑑賞の際、よく書けている鑑賞文を共有し、鑑賞の視点を広くもたせたりしていく。さらに、作品の良さについて言語化する力を身に付けさせるために、語彙を増やせるようにする。 ○第６学年ではより自身の内面に触れるような題材を選定し、美術的な構成要素と表したい主題を関連付けられる児童を増やしていく。	○段取りの弱さと安全面の配慮不足：独自のアイデアはあるが、具体的な製作手順を組めず、用具の安全な扱いにも雑さが見られる。 ○自己満足による停滞：自分なりの工夫を一度すると満足し、よりよくするための追究（試行錯誤）を止めてしまう。	○アイデアスケッチ段階で具体的な製作手順を書き込ませるとともに、活動前の「安全確認・机上整理」をルーティン化する。 ○他者の作品を鑑賞し合う時間を製作の途中（中間鑑賞）に意図的に設定し、新たな視点や工夫を取り入れて「表現を深める（もう一工夫する）」力を育てる。
第6学年	○表現に用いる技法や材料を選択し、表現方法のもつ特性を理解しながら、表したい形に合わせて活用することのできる児童が増えた。 ○作品の構想の段階において、学習用タブレット端末を用いてアイデアスケッチやワークシートに自分の考えを絵や文章にまとめて製作を行うことができた。 ○今までに学んだ表現技法や新たな表現方法など、複数の表現方法を選択できるようにすることで、自分の表現にあった選択を積極的に行えるように働きかける。 ○作品を鑑賞する視点について指導することで、作品の良さを言語化し、他者に伝えることができた。	○模倣への依存：失敗を恐れてか、既成のデザインや他者の真似に終始し、自分なりの表現に挑戦できない。 ○活動の形骸化：鑑賞活動を「ただ見るだけ（作業の終わり）」と捉え、自身の表現へ還元できていない。	○本格的な製作の前に、表し方を試せる「試し用の場」を保障し、複数の技法から自ら選択して組み合わせる主体性を促す。 ○学習用タブレット端末で参考情報を収集・分析（情報の取捨選択）させつつ、製作後はめあてにそって自身の工夫や上達を振り返り、自立的に表現を高める態度を養う。